辛い関係

パン・ドヤマ

高層マンションの中のそれほど高層ではない部屋で、私は一人緊張していた。いつもは居心地良く感じるソファが、今日はまるで無機質な石のようだ。おそらく、その理由は、壁を一枚隔てた向こうにいる「彼女」なのだろう。

彼女は、簡単にいえば、私の不倫相手の正妻だった。彼と打ち合わせていた密会の日に彼のマンションに行ったところ、そこにいたのは彼ではなく彼の奥さんだった。彼女は優しそうな微笑みを浮かべていたが、目はまったく笑っていなかった。私はとっさに言い訳をすることもできず、彼女の圧力に負けて部屋の中に招き入れられた。

「せっかくだからご飯も食べていってよ。」と言った彼女は、台所でカレーを煮込んでいる。私は視線を動かして彼を探したが、どこにもいなかった。逃げたわね、と心の中で彼を非難する。第一何が「せっかくだから」よ。今日私がここに来ることを知っていて、用意していたに決まってる。

しばらくすると、彼女が皿を二枚持って戻ってきた。一枚を自分の方に、もう一枚を私の方に置く。カレー皿を前にして、私は急に不吉な予感に囚われた。私が躊躇っていると、彼女は「大丈夫、変なものは入れてないから。」と笑った。彼女が一口食べたのを見てから、私も意を決して食べ始めた。

美味しかった。ルウは市販のもののようだったが、とにかく肉が軟らかかった。良く下ごしらえがされているのか、噛むほど味が出てくる。私は幸せな気分でカレーを味わいながら、同時に悔しさを感じていた。家事ができなければ、「良い恋人」にはなれても、「良い妻」にはなれないのよ――そう言われているような気がした。

「それでね」と目の前の彼女は言ってきた。「今日は、あなたに提案があるの。」

私は思わず身構えた。不吉な予感が再び頭をもたげてくる。

「警戒しなくていいのよ。確かにあなたが手を引いてくれればありがたいのだけれど、あなたは本当に彼を愛しているようだし。それならいっそ彼に選んでもらえばいいとも考えたのだけれど、彼はほら、変なところ律儀じゃない？だからきっと決着がつかなくなるわ――だから、私達で彼を分けあいましょう。」

私は彼女の言っている事の意味が理解できなかった。それはつまり、夫がたまに不倫するのを許す、ということなのか。怪訝そうな眼をする私に対して、彼女はしかし不気味に笑っているだけだった。

　私は不思議に思いながら、再びカレーに手をつけようとした。しかし、カレーにスプーンを差し入れ、何やら丸いものをすくい上げた瞬間、私は血の気が引いた。と同時に、全てを理解した。スプーンが床に落ちる音が、どこか遠くのもののように聞こえた。気が遠くなるのを感じながら、私の脳裏には、直前の映像が何度もよみがえっていた。
彼が、私を見つめていた。